

囲碁に学ぶ大局観

第2回： 3つの目

囲碁に学ぶ大局観とは、局所的な争いに惑わされず、常に盤面全体を眺めて自陣の形勢を総合的に判断することです。その上で次の一手をどこにするかを決断します。

高い棋力を身につけるには、若年ほど有利とされています。その理由は、頭脳の働きが柔軟な年齢で覚え、継続することで右脳(感性・直感力・パターン認識力)と左脳(論理力)の相乗機能が発達しやすいとされています。しかし、齢を重ねても諦める必要は全くありません。老若男女を問わず、囲碁を楽しみながら打つことで棋力(特に、大局観・推理力・読む力)は着実に向上します。しかも、囲碁以外の分野に必要な諸々の脳機能が同時に刺激されることで、集中力や思考力の向上はもとよりボケ防止にも有効という研究報告があります。

さて、今月のテーマ、囲碁によって習得する“3つの目”に戻りますが、人生であれ、いかなる組織であれその経営にあたって心掛けるべき要諦があります。1つは、羅針盤(自らを制約すべき条件)としての理念・信条を確認すること、2つには、向かうべき方向を示すビジョン(=具体的目標)を描くこと、3つには、ビジョン達成の行く手を阻む外部環境の変化を適時・適確に予見し、精査することです。そして第4には、目標達成のために必要な“戦略”(=方策)を練り上げて行くことです。さらに、第5として、内外の諸事情の変化によって想定シナリオから大きくずれた場合に備え、何らかの対応策を用意しておくことも忘れてはなりません。

これら5つの要諦を網羅し、成功の確率を高めるために不可欠なツールとして、巷間いわれる“3つの目”(鳥の目、魚の目、虫の目: 下記)を使う習慣をつけることも大切です。このことも、囲碁ゲームを楽しみながら身につくメリットです。

国難である今回の東北大震災の復興マネジメントにあたって、政府はこれら要諦を踏まえた計画・工程表をつくり、それを強力なリーダーシップによって確実に実行されむことを期待するものです。囲碁においては、相手の“想定外”の着手に対し正しい応手が打てなければたちまち苦境に立たされます。醜い局後の言い訳は通用しませんし、人生・組織経営においては取り返しのつかない命運につながりかねません。

囲碁の別称に“坐隠”があります。プロの囲碁対局に際し、先手番の棋士が第1手を打つ前に、沈黙考している姿をよく見かけます。盤上に未だ何も無い段階で何を考えているのだろうと思います。まさに“神域”に達したトップ・プロは、対局相手との過去の対戦棋譜などを思い出しながら、今日の対局の構想を描き、初手を選択しているのでしょう。いざ対局が始まりますと、無意識の内に先の要諦を“3つの目”を通して、各局面での最善手を模索・決断していると思われまます。

一般的に言えることは、棋力の高い人ほど、対局中常に全局を広く見渡す“鳥の目”を常時用いていることが伺えます。相手の石音や着手に囚われず、盤上全体を視野に入れつつ次の一手を確認しているようです。

“鳥の目”とは、

「囲碁十訣」(下記)第1に、「不得貪勝(むさぼれば勝を得ず)」

とありますように、盤上の彼我の石群の強弱のバランスを考えながら打てという意味。即ち、対局中常に“鳥の目”を以って大局を見ることの大切さを教えています。“木を見て森を見ず”という格言がありますが、囲碁においても、「木(相手の打つ石音、局所)」に目を奪われず、「森(=全局)」を見ることを忘れるべからずとの戒め。

“虫の目”とは、

「囲碁十訣」第8のいう「動須相応(動かばすべからく相応ずべし)」。即ち、相手の着意を察し、それを上回る着手に心掛けよとの教え。局面の適確な読みと決断のために不可欠の目。

“魚の目”とは、

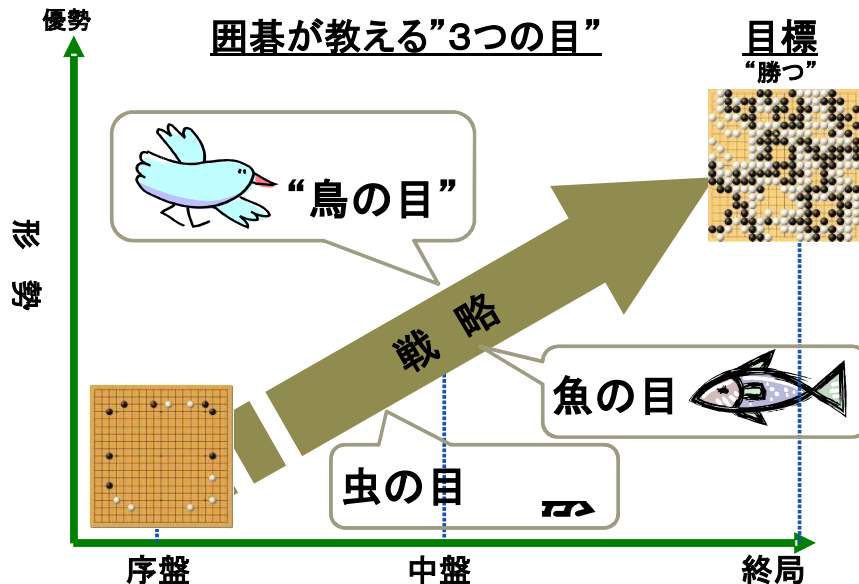
「囲碁十訣」第7のいう「慎勿軽速(慎んで軽速なるなかれ)」が示す原則。即ち、軽挙妄動を慎み、常に冷静沈着であれとの諭し。自らを取り巻く環境の変化(潮目)を読み、羅針盤(理念・信条)に照らし、目標に向けての方向性を間違わぬために必要な目。

<囲碁十訣> 中国・唐代(8世紀ごろ)の囲碁の名手・王積新の作とされる。

1. 不得貪勝 (むさぼれば勝を得ず)
彼我の石の強弱バランスに留意せよ。
2. 入界宜緩 (界に入りてはよろしく緩やかなるべし)
相手陣地に限界以上踏み込むな。
3. 攻彼顧我 (彼を攻めるには我を顧みよ)
自分の弱点を補いつつ攻めよ。
4. 棄子争先 (子を捨てて先を争う)
石を捨てて先手を取れ。
5. 捨小就大 (小を捨てて大に就け)
着手の大小を考えつつ冷静に打て。
6. 逢危須棄 (危うきに逢えばすべからく棄つべし)
積極的に捨て石作戦を取れ。
7. 慎勿軽速 (慎んで軽速なるなかれ)
常に新しい目で冷静に全局を見直せ。
8. 動須相応 (動かばすべからく相応ずべし)
相手の着意を察し、それを上回る着手に心掛けよ。
9. 彼強自保 (彼強ければ自ら保て)
相手の強い場所では、まず自陣の整形を考えよ。
10. 勢孤取和 (勢い孤なれば和を取れ)
自陣の弱い場所で戦いを起こすな。

これら“3つの目”を十二分に機能させ、失敗を恐れず矜持を以って臨むことこそ、何においても

成功するためのカギとなります。(下図参照)



加えて、もう1つ忘れてはならない目として“第4の目”があります。それは、天保年間の『百鬼夜行絵巻』にある「手目坊主」という妖怪の持つ「手の目」です。この目は、小生流に解釈すれば、囲碁で言う”ハメ手（罠のようなトリック手）“やごまかし手を使わず、正道を踏み外さないための目です。いかなる経営においても肝に銘ずべき鉄則でしょう。

最近話題のベストセラーに、『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』（岩崎夏海氏著）という本があります。若者の心をしっかり捉え、チームがその目標達成を勝ち取るための指南書となっています。“経営学”の創始者・P・ドラッカーの組織経営の哲学をベースにした名著です。ドラッカーは、“3つの目”に加え、“耳”の重要性も強調しています。即ち、如何なる組織にあっても、その経営の目的は対象とすべき相手（＝顧客）が何を求めているかを知り、それを満たすことと教えています。そのためには“耳”を研ぎ澄ますことが肝心。

ドラッカー自身囲碁をたしなんだかどうかは分かりませんが、日本の伝統文化に心酔し、日本人の心に敬意を抱いていたことはよく知られています。つまり、“耳”を通して対局相手の強み・弱み（＝人となり、考え方、癖など）を事前を知ることで、結果としてゲームを有利に導くことを囲碁は教えてくれます。

<以上>

足立敏夫

「囲碁と経営」研究家

（元・羽衣国際大学教授）

出所：株式会社キャリアクリエイティブ月刊誌「LDノート」5月号（2011年）